

水平線【院長コラム 2026年4月】

思い出は今に

桜からハナミズキ、ツツジ、そしてフジの季節になると、新緑の木々の間を流れる溪流が頭に浮かぶ。朝靄が消えてくると差し込んだ木漏れ日が水面を照らしそして影を作る。入り組んだ巨岩の間を流れ落ちる水は透明度が高く、そこで立ち尽くして流れを見続けていたことも懐かしい。そして34年前、和歌山県西牟婁郡大塔村富里（現田辺市下川上）の溪流で釣れたアマゴは、深い黒銀の体表に鮮やかな朱点がちりばめられ、息を呑む美しさであった。

初めて行った紀南地方で、新参者の私に釣り遊びを教えてくれた村の友人は明るくよく喋り、来る人には分け隔てなく自分にできる限りのもてなしをした。そんなにまでしてという驚きを感じていたものの、よくよく見渡すと多くの村人も同じ振る舞いであった（後にそれは映画「海難1890」の、遭難者に向かい合う串本の住民情景で見事に表現されている）。

大塔村役場（現大塔行政局）前には「知恵だし、精だし、やる気をだそう」の大きな看板が立っていた。できる人は先頭に立ち、危なっかしい人はみんなで支え、どうしても難しい人は一歩離れてみんなで見守っていた。そこに感じた思いやりや一体感は、私に心地よい安心感を与えてくれた。

昨年、私はいくつかの勤務先を経て有田市にやってきた。この地でも思いやりや優しさをもって接してくれる人々に会うことができ、和歌山県に住む幸せを改めて感じている。33才から過ごした2年間の大塔村生活は、どこの土地に行っても亡き友人を少しでも真似てみたいと思う気持ちを残してくれている。